

掌の小説Ⅰ

火事の夢 悲の碑 吉野山心中 黒焼き

山に叫ぶ フェリーの風景 芽吹きところに

神野麻郎

火事の夢

図書館が火事だったのである。

三階建の、さほど大きくはない鉄筋コンクリート造りの図書館の上部一面に炎が立っていた。私はそれを道から見ていた。少し曲がり少し上るその道を歩いて図書館に近づき、中に入っていた。一階のフロアでは職員たちが書類や本を持って右へ左へと歩いていた。彼らは、私が三年前に退職した大学の図書館の職員たちで、皆顔見知りだった。女は紺色の制服を着て、男はワイシャツ姿だった。火事が起こっていることは皆知っていて、右往左往しているのだが、でも表情には余裕があった。私はそれが少しふしぎだった。そして図書館なのに、その部屋はふうのオフィスのようで、本が目立たなかった。

私は火事のようにすを見ようと二階まで上がった。鉄のドアを開けて外のバルコニーに出て見上げると、三階の窓は火を噴き、屋上は火煙が帯のように流れていた。やっばりすごい火事だと思った。火に近かったが熱くはなかった。中に入ってドアを閉め、二階のフロアに入っていた。すぐ上があんなに燃えているのに、そこは熱くもなかった。そこでは薄緑の作業着を着た人たちがたくさん坐ったり歩いたりしていた。そこでもあわてたふうはなかった。彼らは役所から来た人たちらしかった。私は彼らとも顔見知りのようだった。四五人が大きなテーブルを囲んで談笑しているところに近づき、

「火事の対策を話し合っているのではないのですか？」と、詰問調ではなく、単純な疑問として訊ねた。すると彼らは少し姿勢を正して、中の一人が、

「ええ、そうなんですよ。火事の対策を話し合っているんですが」と答えた。細長い顔で髪の毛の豊かな中年男だった。

上の方はあんなに燃えているのに、と私は思わなかった。誰も本を運び出したりしていないのも、消防の気配がないのもふしぎだとは思わなかった。でも火事はもつと拡がりそうで不安だった。

悲ひの碑ひ

「私はどこを漂っているのでしょうか。坊やはどこ？ 義父ちちの姿も見えないのです。誰か、教えてください。助けてください。」

朝方、まだ暗いうちに高知の港から乗ったのはかなりの老朽船でした。今どきですから、どこかの港につながれていた古い船が徴用されてきたのでしょう。貨客船で、百人以上の客とたくさん荷物が詰めこまれました。積荷には都会で不足している食糧が多いようでした。

この一月に夫が南方で戦死しました。報せが届いたのは一ヶ月も後で、遺品といえば箱に入ったわずかな身の回りの品だけでした。悲しみの中、親族とあわただしく葬儀を営みました。四十九日の法要を終えた後、私は義父に呼ばれました。義父はこう言うのです。家内とも相談してよくよく考えてみたが、おまえはまだ若いし、坊やは幼い。この家でこの先望みのない生活を続けるよりも、坊と二人で実家に帰ってやり直す方がよい。決しておまえたちをこの家から追い出そうというのではないことはわかってくれるだろう？ おまえが帰れば京都のご両親も喜んでくださるはずだ。

私は涙が出ました。義父たちの思いやりが身に染みわたります。夫の出征以来、私と坊やは市内の小さな借家を出て夫の実家に身を寄せていたのですが、夫は次男で、家は長男の義兄あにが継ぎます。その義兄もやはり出征中で、義姉あねと三人の子供が家を守っていました。一方、私の京都の実家では妹も嫁いで、老いた両親だけが寂しく暮らしていました。そんなことでしたから、私もあまり迷わずに義父母の言葉に従うことにしました。それなら早い方がよいという話になって、京都の実家の承諾も得て、五月の末に船に乗ることになったのです。

たいていの荷物は別便で送ることにして、私は多少の手荷物だけ持って坊やと二人で旅立つつもりでした。でも義父が、いや、そんなふうに淋しくおまえたちだけを送り出すわけにはいかない、坊もまだ小さいし手荷物もある、私もこの際は京都まで行っておまえのご両親に会って今までのお礼とこれからのお願いとをじかに申し上げたいのだ、と言いました。義父ももう高齢で持病もあり、義母ははも私も一人だけの帰りがかえって心配だからと引き留めましたが、昔気質で頑固な義父です、いや、それくらい大丈夫だ、年寄り扱いするなと譲りません。それで三人で乗船することになったのです。

義父は十年ほど前に中学校の教師を定年退職しましたが、晴耕雨読の暮らしを楽しんでいたのもつかの間、世の中がきな臭くなり、この非常時に遊んでいては申し訳ないと近所で多少の田んぼと畑を借りて耕作するようになりました。それで欠乏しがちな家族の台所もだいぶ助かってきたのです。今度の旅でも、義父は自分で作った米野菜を背囊に詰めて

船にかつぎこみました。船で高知から大阪まで、大阪からは電車に乗ってその日の夕方には私の実家までたどり着ける予定でした。

出港は夜明け前でしたが、岸壁で義母や義姉らゆかりの人たちが手を振って見送ってくれました。闇の向こうに、昨日一昨日次々に実家にやって来て別れを惜しんでくれたゆかりの人たちの顔も浮かびました。これまでを思いこれからを思うと涙が出ました。でもこの幼い坊やのためにも私がしっかりせねば、と気を引き締めようともしました。岸壁はそんな早い時刻にもかかわらず、見送りの人であふれていました。電灯の黄色い光の下に、老若男女のいろいろな表情が劇の中の情景のように照らし出されます。何人もが泣いています。船で行く人と岸に残る人と、私たちには私たちの事情があるようにみなそれぞれ的人生上の事情があつて別れるのにちがいません。あまりに感傷的になったのでしょうか、老朽船がおもむろに岸壁を離れた時、私はふと、これが最後に見る高知の情景なのかもしれないとなく思つたのでした。

船室は階段を下りた所でした。混みあう中、先に立った父が三人が寝ころべるだけの場所を確保してくれました。室内は換気が悪くむっとして、油の臭いが鼻をつきました。そのうえ機関音が響き、壁も床もたえず細かく震えています。それでも寝不足で気疲れもした私たちは、夜が明けるまではと古毛布を被つて窮屈に莫産の上に身を横たえました。まわりの人たちも同じようで、初め騒がしかったのがしだいにひそまっていきました。でもすぐに私の一歳半の坊やが、夜中にあちこち引きまわされて安眠できなかつたのでしよう、むずかつて泣き出してしまいました。迷惑になるので、私は半身を起こして板壁に向かい、着物の前を開いて乳をふくませました。このごろはもうほとんど出ないのですが、それでも乳をふくませると子供は安心するようで、そのまま寝てくれることがあります。

近くで四五人の男たちが車座になってさかんに話している声が耳に入ってきました。話題はやっぱり戦況です。あちこちの戦地でわが軍が戦果を上げたという威勢のよい話が続きました。ところが酒でも入っているのか、一人の赤黒い顔をした中年の男が、

「おまえら、知らんのか。この船も危ないんやぞ。いつアメリカの潜水艦にやられるかわからんぞ」とぶっそうなことを言いだしました。男は、この間知り合いの漁師に会うたら、豊後水道で敵潜水艦を正目に見たと言うとなつた、豊後水道に現れたんだったら、敵潜水艦はもうこの辺の海にも出没しとるはずじゃ、と言うのです。

「そんなん、うそだろ！」と別の声言つて嗤い飛ばしました。「考えてもみい、日本の海やぞ、わが大日本帝国海軍の目を逃れてそんなことができるわけがないわ。腰抜けの毛唐らにそんな勇氣があるわけない。きっとその漁師が、鯨かなんぞを潜水艦に見間違えたんだろ」

「けどなあ」と先の男が言い返します。「東京ではもう本土決戦の準備を始めたというではないか。とゆうことは、敵がもうだいたい日本本土の近くまで迫ってきてとる、ゆうことじ

や。どうな、今年になってから身の回りで戦死者もずいぶんふえただろが？」

「いやあ、万が一にやぞう、おまえのゆうように敵潜水艦が近うまで来とるとしてじゃ、けんど民間の船は撃たんはずだろ？ 国際条約でそうなつとるはずじゃ」

「いや、おまえら知らんのか。この船もじつは軍から哨戒任務を負わされとるらしい。だつたら撃たれるかもしれんぞ」

そばに横になっていた義父が急に半身を起こして、

「おい、その人たち。そんな話、その辺でやめとかんか。皆さんが不安がりなさるだろ」、とちよつと厳しい声で注意しました。こちらをにらんでくる男もいましたが、それでその話は途切れました。でも私は、万が一にもそんなことがあるのだつたら、と怖くなりました。胸の内ですらどうぞ助けてください、坊もいるんですから、と願い、坊やを抱きしめたのです。

外洋に出たらしく、船は横揺れを始めました。ぎしぎしと壁や床が鳴りました。吐く用意に隅の方に置いてあるアルマイトの洗面器を取りにくる人たちもいました。そのうちに壁の丸窓が白んできました。横になっていたまわりの人たちも少しづつ起き出して、弁当を取り出したりしています。私たちも義姉が持たせてくれた竹皮のおむすびを広げ、坊にも食べさせ、お茶を飲みました。食べ終わると坊はすっかり目を覚まして、歓声をあげてあたりを駆けまわろうとします。いつもに変わったあたりのようすがものめずらしく、興奮しているようです。通路に散らばっている履物につまづいてころび、泣き出しかけたので、私は義父に声をかけて坊を抱き上げ、階段を上って甲板に連れ出しました。

甲板の上では、青白い空気の中、もう起きたのか、徹夜をしたのか、何人もの人が坐ったり歩いたりしていました。腕から下ろしてやると坊は喜んで、走り出しました。船がゆっくり横揺れして危ないので私は追いかけて、つかまえようとしみます。長椅子に坐っていたおばさんが、「まあまあ、かわいい子じゃねえ。おいでおいで。これあげよ」と手提げ袋からお菓子を取り出してくれました。坊は同じ長椅子に上がって嬉しそうです。おばさんは、須崎から出てきた、大阪にいる娘がまもなく出産するので手伝いに行く途中だと言いました。出産間際なのにまだ軍需工場に動員されているそうで心配じゃ、せめて滋養をつけてやろうと、ちよつとじゃが米野菜を持って行ってやるんじや、というのです。私たちの事情を少し話すと、まあまあ、旦那さんが、奥さんとかわいい坊やを残してねえ、今の時代は誰も彼も大変やけど、あんたらもほんまに苦勞するねえ、と同情してくれました。

甲板では機関音もさらに大きく、風のぐあいでも時おり悪臭のする煤煙も流れてきます。でも空が明るくなってきて、目を遠くにやると長々と続く海岸線や山並みが朝日を受けて淡く色づいていました。ところどころに家並みも望めます。きれいだと思いました。戦争中だというのがうそのような、どこか別の国のことのような気がしたほど、それは平和で美しい光景でした。

やがて義父も外に出てきました。伸びをしてから坊を抱き上げ、笑顔で、ほら坊、あれが何山だ、あそこにカモメが飛んどん、海面に浮いとる白いはクラゲじゃよ、などと教ええます。義父はふだんから坊を手放しでかわいがってくれます。期待をかけていた息子を失ってからは、ますます坊をいとおしむようです。その坊とももうすぐ別れてしまうのですから、義父も義父なりにつらさをこらえているのにちがいません。

坊が船の揺れにも慣れてじつとしていないので、甲板で遊ばせたり、また船室に降りていったりをくり返しました。そのうちに船は室戸の沖にかかったようです。すると甲板にいた何人かが岬の方に向かって合掌を始めました。義父に訊くと、丘の上にある札所のお寺を遙拝しているというのです。そばにいた人々も、私たちも倣って手を合わせました。み仏に、坊や家族の無事と世の中の平穏を願いました。その時ふと、夫がすぐそばに来ているような気配を感じました。でも、その顔は血糊で濡れているのです。戦死の報以来、いやでもその死の場面を何度も想像してきたからでしょうか。不吉な感じをおぼえました。不吉さは、陸地とは反対側の大きな海原を眺めた時にも感じました。灰色のまじった、怖いくらいに何もない茫洋とした海が禍々しくたゆたっていたのです。

室戸の岬をめぐる、いっそう明るい光が陸地の上に降りそそいでいました。

船室に下りて、眠りかけた坊を胸に抱きながら隣の人とぼつぼつ話していた時、ドーンと近くでなにか大きなものがぶつかったような、激しい重苦しい音が響きました。同時に壁や床が変に大きく揺れました。私は坊を抱きしめました。義父が膝立ちして怖い顔で階段の方を見えています。部屋は一瞬静まりました。でもまもなく部屋がだんだん傾いてきたのです。叫びがいつせいに起こりました。義父がなにか私に向かって叫びました。私はそばの柱につかまろうとしましたができず、坊を抱いたまま後ろにすべり、倒れました。その上にほかの人の身体がかぶさってきます。私は坊がつぶされないように必死で身体を張りました。でもその時、水が、大量の潮水が上から噴きおろすように落ちてきたのです。その後のことはもうわかりません。ただ、一瞬の間に、頭の中にほとんど同時に、いろいろな映像が浮かびました。母の背中に負われている幼い自分、若い父の気まじめな顔、友だちと笑いころげている女学生の私、角帽と制服姿の夫と賀茂の川辺、高知の借家の寝室、夫と赤ちゃんの坊やと満開の桜……。

阿波の日和佐から土佐の室戸までは海岸沿い八十キロの道である。その間、札所はない。二〇一×年五月のある朝、一人の通路が暗い顔をしてその道の室戸に近くなった所を歩いていた。五十歳くらいのその男の頭では、生きることはつらく、死ぬことは容易だった。

山が海になだれ落ちている崖沿いの道が長々と続いていた。左手に大洋が広がり、コンテナ船などが浮かぶ沖の方はかすんでいた。目の下の海岸に波が寄せて引くたびにゴロゴロと丸石が転がりぶつかる不気味な音がした。

男はふと、道から少し離れた岩場の上にだいぶ大きな石碑が一つ立っているのに気づき、なんとなく下りていった。碑文を読むと、戦争中この海の沖でアメリカの潜水艦の魚雷攻撃を受け、轟沈した船の多数の死者たちを祀る慰霊碑だったので、男は驚いた。沈んだ心にはかえってその衝撃が奥まで響いた。そのことが七十年前も前とも思えず、この海の沖での惨劇の想像が痛かった。男は線香を手向け、お経を読んだ。

判明しただけの三十七人の犠牲者の氏名と年齢が刻まれていた。男はその文字列をゆっくり目で追った。若者や壮年がいる。子供も老人もいる。あるところでは、苗字が同じで家族らしい三人の名が並んでいた。祖父、六十七歳、娘（母）、三十四歳、子供、一歳。

吉野山心中

奥千本の西行庵というのはほんとに小さな庵でした。人気もない山中で、中で木像の西行さんがひとりさびしく坐っていました。先生が西行の話をしてくれました。八百年余り前の西行は京都の御所に仕えた武士だったのに、二十三歳の時、世をはかんで妻子を捨てて出家したそうです。吉野山やあちこちで修行しながら歌を詠みつづけて、その時代随一の歌人になりました。桜の花と月をこよなく愛しました。おじいさんになって、生前「願はくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ」と歌を詠んでいたとおりに、旧暦二月の満月のころに河内の国のお寺で亡くなったそうです。昔はそんなふうには純粋に生きた人もいたのです。今は秋、花はありませんが、あたりの桜の木の満開の景色を想像して、夢のような世界で死んでいったその人がとてもうらやましくなりました。

そこから少し引き返してから、道をさらに奥に進んでいくともう桜の木は絶えて、杉林の中に細い林道が続いていました。私たちは手をつないで歩きました。山のおいしい空気の中、軽装で日除けの帽子にリュックの先生はどこか楽しそうです。私も帽子、スニーカー、ズボンに小さなリュックの格好です。ほんとうは好きな柄のワンピースを着てお化粧も少ししてきたかったです。さすがに山の中には不似合いです。先生の笑顔が伝染して、私も冗談を言ったりしました。でも杉木立の山中は、二人が黙ると自分たちの足音だけしか聞こえないさびしい世界でもありました。ゆるい上りの道を行きながら、先生は日差しが弱まってきたのを少し気にしました。ここまで来る途中、蔵王堂を見物したり眺めのよい所で弁当を食べたりして、思ったより時間がかかってしまったようです。

道はやがて谷筋に沿って下りになりましたが、誰にも会わず、山中にずっと二人きりで

す。そのうち急な上りになり、先生は先に立って私を引き上げてくれます。でも息が苦しくなって、途中で何度か休みました。どこまで登っても小暗い杉と檜の林でした。息を切らしながらようやくその山の尾根筋に出ました。日の当たる少し開けた場所で汗を拭き、地面に坐っておやつを食べました。あたりは山また山ですが、一ところ、眼の下遠くに、人家の集まっている所が望めました。先生は地図を広げてたしかめ、「〇〇という村らしい」と言いました。川の曲がりにはばりついているような小さな村はなんだかさびしく見えませんでした。「もしぼくらがあそこに生まれていたら、どんな人生だったろうね」。突飛な想像ですが、ふだんから先生はそんなことを言う人です。心がどこか現実からはちよつと離れていて、いつも目に見えないなにかをあこがれて生きているような人です。「そうだったらよかったかも。山の中で、林業で、木こりさんするのかな。私は山菜取りや川で洗濯。でも先生、木こりさんなんかする力ありますか？」と私はからかいます。「そうだね」と苦笑する先生の額に汗が光っています。

それから尾根道をしばらくたどりました。でも道を歩いていたつもりが、いつの間にかわからなくなりました。それでも高い木々の下はすいていて、枯れ枝や落ち葉を踏んで歩きました。南斜面を横手にたどっているようでした。半時間ほどもそうしていると、急に日がかげってきて、あたりはたそがれてきました。少し下った所で小さな流れに行き当たりました。私たちはそこで留まることに決めました。

少し冷えてきたので、あたりの枯れ枝や枯葉を集めて火を焚きました。キャンプに来たような楽しい作業でした。火のそばで、リュックに残っていたパンやお菓子を食べ、水筒の水を飲みました。離れた所で用を足しました。火を囲んで燃え立つ炎を二人とも黙って見つめました。立つ煙、枯れ木や枯れ葉の焼けるこおばしいにおい。炎の明りのために、あたりはもう真っ暗に見えました。風はほとんどありません。他愛のない会話がふと途絶えた時、一言、「後悔してないか？ まだ引き返せるよ」と先生が念を押すように訊きました。「後悔なんか」と私は笑顔で答えました。「すまない」と喉につまったような先生の声。「すまない、と言うことなんかないよ、先生」と私は返しました。「先生が悪いと思ったことなんか、今まで一度もないよ。ほんとうだよ」。でも笑ってそう言ったつもりなのに、なぜか涙があふれてきました。先生の手が伸びてきて私を抱き寄せました。どうしても身体が斜めになってしまう場所で、長いキスをし、最後の抱擁をしました。

その後、私たちは流れでタオルを濡らし、火のそばで裸になって身体を拭きました。先生の身体も私の身体も炎の色を映しました。まるで原始人だね、こんな所で裸になると笑いました。私は先生のリュックに入れてもらっていた制服を着ました。先生と最初に出会った時が制服だったし、それに先生も制服がいちばんよく私に似合っていると言ってくれたからです。下着やソックスも新しいものに取り替えました。

こんな人里離れた山中の夜でも、音は聞こえるのです。枯れ枝や葉が落ちる音、微風に

葉が擦れる音、なにかの鳥の声。そして火が消えると星明りで、まわりの木々のかたちがわかりました。あたりには人ではないなにかが、いろいろなものがあるような気配です。木の間から見えるのは怖いくらいに澄んだ星空です。暗いのでかえって五感が研ぎ澄まされて、ほんとうに私たちはいくらか原始人に還ったのかもしれない。「その木にしよう」、先生が幹の太い枝の張った一本の木を見上げました。

先生と親しくなったのは一年ほど前のことです。放課後、国語の読書感想文の宿題について職員室に質問に行ったのが始まりでした。先生は空いた教室に私を連れて行って、丁寧に質問に答えてくれ、ついでに文学の話もしてくれました。話しやすかったので、私はつい個人的なこともしゃべってしまいました。先生は微笑んで聞いてくれました。三十分ほど互いの顔を見合いながら話したその時、もう二人の心は通い合ったのです。少し色づいた日がさしこんで、窓ガラスが光っていました。

先生は授業中にもよく冗談を言って、生徒に人気のある先生でした。背が高く、眼鏡で長髪なのも、ある人気俳優に少し似ていて、女生徒の間では評判でした。でも私には先生は楽しいばかりでなく孤独そうにも見えたのです。授業中にも、ふっと口をつぐんで横を向いた瞬間、さびしさが漂うのです。そんなことが、片親で一人っ子の私のさびしさと通じたのかもしれない。

先生は大学の文学部を出ていて、文学が好きでした。文学をあこがれていました。質問に行った日の後も、放課後の教室で何度か、私だけを相手におもしろい小説や美しい詩について話してくれました。私はそれをメモして、後でそれらの作品をできるだけ読んでみようと思いました。私からは自分のことやなにげない日ごろの思いを話しました。先生はやっぱり微笑んで聞いてくれました。初めてだと思いましたが、私が人の前で構えず素直な気持ちになれたのは。私は幼いころからずっと、母親の前でも友だちに対しても、ほんとうの自分をかくして構えたりつくろったりしてきたように思います。自分というものはじつは自分にはではなく、自分と人との関係の中にこそあるのだ、とも本で読みましたが、私にはそうは思えず、人との関係の中の自分と一人の時の自分と、いつも自分が二人いるようでした。でも先生の前ではほんとうの自分をさらすことができたのです。というより、自分でも気づいていなかった私の中の私を先生が引き出してきて、ほらこんなにいいものだよと教えてくれる感じでした。

日曜日にドライブに誘われた時、私は嬉しくて、いろいろ想像してその夜は一睡もできませんでした。二、三度車でデートした後、少し離れた街の郊外のホテルに入ったのは自然な流れでした。身体を合わせてもっと深く先生と一つになれたのはこのうえない喜びでした。それからは学校ではあまり二人だけでは話さないようにして、放課後や休日に人目につかないよう待ち合わせて逢うようになりました。でも田舎の町には人目がいろいろと

あつて、二人のことはほどなくうわさに立ってしまいました。

それからの月日は、苦しいといえば苦しく、甘いといえれば甘い時間でした。発覚してから二人は多くの人に責められました。私は母親や友だちに、先生は校長や他の教員に、そして奥さんに。二人が校長室に呼びつけられて何人かに囲まれ、今後はもうつき合いませんという誓約書を書かされたこともありました。その時先生はうなだれ、私は泣いているしかありませんでした。

つらかったのは、そんなふうには誰彼から叱られ非難されたことよりも、そのために二人で逢いにくくなったことです。電話もできません。夕方、先生の家近くの鎮守の森まで自転車で行って、先生が犬を散歩させる時に逢ったり、休日の夜に思い余って遠くの町に車を飛ばしたりしました。母は私にあまりかまわない人なので、私の方は自由になったのです。学校ですれちがう時に人目を気にしながら交換ノートを渡し合うという冒険も、どきどきしながらしました。でも度重なると見つかつてしまい、また呼びつけられました。

でもその人たちにはわからなかったのでしょうか、まわりから責められるたびに、かえって私たちの結びつきは強くなったことが。私たちの間で豊かに通っている感情こそがほんものできれいで、それを無視したり否定したりして常識や決まりごとや道徳を説く他の人のどんな言葉にも汚いウソが混じっているように私には聞こえました。若い男と女が出会って互いに同じくらい、これ以上ないほど好きになったのです。それだけのことなのです。それがどうして悪いことなのでしょう。でもあまりに長く手ひどい攻撃を受け続けたので、私たちはどこかへ、できれば二人だけの世界へ逃げたくまりました。私たちはひそかに逃亡計画を立てました。この窮屈でウソだらけの現実から逃げ出して二人だけになる、二人でこの想像にふけることは楽しくもありました。

二学期になる前、とうとう先生は学校に辞表を出しました。九月の終りまで待って、私は家出をして先生の待つている京都に行きました。先生は駅で出迎えてくれました。そしてホテルに泊まりながら、一日はレンタカーを借りたりして、三日ほど、京都の名所を巡りました。私は京都は初めてでしたが、国語教師で古典文学も教える先生は古都の名所や遺蹟をよく知っていてあちこち案内してくれました。きれいな川の流れる宇治という所では、「源氏物語」の浮舟と匂宮がこのあたりで愛欲に浸ったのだという話もしてくれました。私たちも毎晩ホテルで抱き合いました。幸せでした。長く生きてきたわけではありませんが、この世ではもうこれ以上嬉しいことはないのだろうと思えました。先生は私が美しいと言ってほめてくださり、私の身と心をいつくしんでくださいました。私は顔にも身体にも性格にもいろいろコンプレックスがあるけれど、そう言われると私も今こそ私のいちばん美しい時だろうと思えました。

京都の後は奈良に行って三泊しました。そこでもレンタカーを借りて足を延ばし、先生はきれいな景色や有名な文化財を、腹いっぱい目いっぱいになるほど見せてくれました。

ふしぎなことですが、京都でも奈良でも今こそ二人でそれらを見て美を味わったり歴史を感じたりすることに意味があると思えました。今こそ美しいものが美しいままに自分の中に入ってくるかと食欲になりました。私は修学旅行生みたいに、先生の説明の要点を小さなノートにメモして、少し自分の感想も書き加えました。たとえば宇治なら、「川のほとりに浮舟住む、薫、匂宮との三角関係に悩んで入水、時に二十二歳くらい、のち助けられて出家。浮舟は哀れだ、流れの速い宇治川は無常を思わせる川、愛も無常か」といったふうです。かんたんなスケッチも入れ、絵日記のようになりました。他の人の目には、私たちは熱心な見学者に見えたことでしょう。毎晩、次の日が楽しみでした。先生もそんなふうだったのです。

そして吉野山に行くバスに乗りました。乗る前に、目についたポストに、私たちは前の夜に書いた手紙を投函しました。私のは母親宛で、お母さんを裏切ってこんなことをしてしまつて、ほんとうにごめんなさい、どうか許してください、お母さんは悲しむでしょう、でも信じてもらえないでしょうが、私は今最高に幸せなのです、と書いたのです。先生は元の勤め先の学校と、奥さんに宛てて書きました。やっぱりお詫びを書いたのだと思います。

今、私の身体は檜の木の太い枝の下に下がっています。もう動けません。隣に、肩がふれあうように先生の身体があります。やっぱりもう動きません。夜の闇の中です。

いつか人が来て発見すれば、二人は無残な姿になっているでしょう。そのうち鳥につつかれたりケモノに喰われたりするのかもしれない。でも身体はもういいのです。

私は後悔していません。生きている人たちに対して何も望みません。あの世というものも信じていません。星になるとか、風になるとか、そんなイメージもいりません。ただ、短い間だったけど、先生とほんとうに愛し合えたことだけを喜んでいいます。

黒焼き

辰夫は小さい時、爺ちゃんに、二階には絶対に上がるな、と何度も強く言われた。そう言われるとかえって気になり、二、三度上がろうとして見つかり、死ぬかと思うほどこつこつと打たれた。それ以来ずっと上がらず、二階への階段口さえ見ないようにする癖がついてしまった。それで辰夫にとっては一階と庭だけが自分の家で、二階はないも同然だっ

た。

その辰夫も今や十五歳になり、自分の身体がだんだん変化して、それに合わせるように気持ちもそれまでのように単純ではなくなってきた。気分の中にいつも何やら濁ったものがある、友だちとはすぐ口喧嘩や殴り合いになるし、同級生の女の子の胸やら脚やらがやたらと気になった。このごろオレの目つきはだいぶ悪くなったと自分でも思う。大人たちへの反抗の気分も強まった。学校の先生たち、駐在所のおまわり、映画館のオッサン、市場の人たち、それにウチの爺ちゃんも、大人たちは子供に向かつて口では適当にうまいことを言いながら、何か大事なことを隠している感じがしてならない。うまい食べ物をひそかに取っておくように、子供たちの知らない所でそれを自分たちだけが享受し、いい思いをしている。きっと子供たちがそれを知ったら自分らの取り分がだいぶ減ってしまうので、大人たちみなが口裏を合わせて隠しているみたいだ、卑怯な奴らだ、そんなふうには辰夫は思う。

そんな思いが強まってきたこともあって、二階にはどんな秘密があるのだ、と背のだいぶ伸びた辰夫はふたたび気になってきた。それでとうとうある日、爺ちゃんが留守の時、まるで結界の縄を押し切るような気分であつてそつと二階への薄暗い階段を上がつてみた。踏板がぎーぎーと音を立てるたびにどきどきとした。上には、誰か、何か、いるのか？ いや、そんなはずはない。爺ちゃんはさっきたしかにバイクで出かけた。

昼間なのに二階は小暗い。むし暑いころなのにサッシの窓やカーテンを閉め切っているみたいだ。上がってスイッチを探し、廊下の電気をつけてみる。廊下と二部屋がある二階の造りが他人の家のように初めてわかった。手前の部屋は仕切りのガラス戸が開けてあつて敷きっぱなしの蒲団が見える。上蒲団がめくれかえつたままになっている。紙くずや空瓶なんかも散らばっていて乱雑だ。オレにはソージソージとうるさいくせに、なんや、自分の部屋はきたないやんか、なんやこんなをオレに見られとうなかつたんか？、と辰夫は頭に浮かんだ爺ちゃんの頭をひとつこつんと殴つてやる。

奥の方の部屋は、しかし鍵がかかっていた。南京錠というのか、今どきあまり見ないごつい鍵だ。それを掛けた引き戸も金属板を張つて頑丈に作つてあつて、揺すつてみたがガタガタ鳴るだけだった。部屋の中からか、かすかに異臭がする。爺ちゃん、なんか隠してるな。ここでこそそなに悪いことしとるねん、と辰夫は疑った。その時下の方でガタンと音がして、一瞬心臓が跳びはねた。爺ちゃんやったら大変や。いや、ちやうちやう、怒鳴られたら怒鳴り返してやったらええねん。昔とちごうて、もう叩かれへん。あんなちつこい身体、こつちがすぐに転がしたるわ。

辰夫は爺ちゃんという人が嫌いではない。爺ちゃんは無口でぶつきらぼうだが、衣食などの面倒は見てくれるし、時々けつこうな額の小遣いもくれる。二人しかいないので多少

の料理や洗濯や掃除は分担してできるよう、子供の時からしつけられたが、それさえこなしていれば別に文句は言わない。このごろでは友だちの親のようにあまりあもしろこうしろと干渉してこないのが楽だと思っている。

でも爺ちゃんはほんとうに自分の爺ちゃんなのかどうか、と辰夫は今でも疑っている。爺ちゃんは色黒で小太りで背が低く、辰夫は色白で上背があつて細い。二人の顔の造作もちつとも似ていない気がする。性格も爺ちゃんは陰気で無口だが、辰夫は、あまり本心からではないが友だちの間ではよく冗談を飛ばすおもしろい奴で通っている。

辰夫は自分がまだ幼い時、爺ちゃんはどこかで自分を拾ってきたのではないかと思うことがある。その証拠に、爺ちゃんは辰夫がものごころついたころ、おまえの両親はおまえがまだ赤ん坊の時に二人とも交通事故で死んだんやとかんたんに教えたばかりで、その後親たちの話はめつたにしたがらない。親たちの写真も一枚もないし、仏壇みたいなものも家にはない。中学生になった時、辰夫から親たちのことをもう一度問いただそうとしてみたことがあるが、爺ちゃんは怖い顔をしてそっぽを向いた。それ以来なんとなく訊きにくくなった。

辰夫は、爺ちゃんが今までどんな仕事をしてきたのかも、どうして生活費を稼いでいるのかもよく知らない。爺ちゃんは一階であれこれ家事をしたりテレビを見たりするのでなければ、二階に引きこもって何かやっている。それは、ぎーぎーごとごとと音が聞こえたり、しきりに足音がしたりするのでわかる。

爺ちゃんの生活時間は自由というか、不規則だ。昼間寝て夜中じゅう起きていることもある。ふらつと出かけ、帰ってこない日もあるし、朝方ふらつと帰って来たりもする。出かける時はたいてい原付バイクだ。辰夫は訊かないが、夜の外出が多いのは、どこかの女に会いに行くのだろうと思っている。あんな爺さんであの顔でと思うが、大人たちにはいろいろわけの入り組んだ男女関係があるのだろう。相手がどんな女なのか、辰夫は想像したこともないししたくもない。ただ、気前のよい女らしく、爺ちゃんは金回りが悪くなさそうだし、よくバイクの荷台にもらい物を積んで帰ってくる。

爺ちゃんの仕事はよくわからないが、行商のようなことはやっているらしい。というのは、自転車で下校する途中で爺ちゃんが誰かと立ち話をしているのを何回か見かけたことがあるからだ。自宅と中学校との間に、わりと大きな総合病院がある。その前や裏あたりで見かけることが多かった。たいていは年配の人を相手に、手にした包みを売ろうとしているようだった。その時の爺ちゃんのようにいつもとぜんぜんちがっていたので驚いた。家ではたいていぶすつとしていのに、そんな時は顔に満面の笑みを浮かべて、舌もちゃらちゃら動かし相手の説得にかかっているようだった。あれはたまに家にも来る押し売りの表情と似ていた。もしかすると爺ちゃんも、いかがわしい健康食品なんかを売っているのかもしれない。

辰夫は、二階の一部屋に入れないとなると、ますますそこに何かあるのか気になってきた。まさか死体を隠しているとか、麻薬を隠しているとか、そんなことはあるまいが。数日、入る方法を熱心に考えた。また戸をがたがたやっても力づくでは外せそうもない。もしむりやりに外せても跡が残ってしまうだろう。一階の屋根を伝えれば外から入れるかもしれない。ただその部屋は外から見上げても年中雨戸が閉まっているので、中からも窓に鍵を掛けている可能性が高い。そこまで考えて、そうや、鍵を探せばええんや、と辰夫はやっとながめた。爺ちゃんが掛ける時は、あの部屋のあのごつい錠を開ける鍵を家の中のどこかに置いていくはずだ。置いていくというより、疑ぐり深い人間だから、隠していくはずだ。玄関の鍵ならともかく、部屋のごつい錠のけっこうかさばるだろう鍵を外にまで持ち歩きはしないだろう。一階にも置かないだろう。二階のどこかだ、とまで思いついて、また爺ちゃんが留守の時、階段を上がって引き戸の周囲を探してみた。見つからなかった。あいかわらず乱雑な爺ちゃんの部屋に入って筆筒やら押し入れやらを探した。そこにもなかった。引き上げるしかなかった。

でもこうなると、十五歳の辰夫にも意地のようなものが出てきた。爺ちゃんと隠しゴッコをしているようで、そんなら負けるかーというつもりになった。そればかりではなく、それだけ嚴重に秘匿しているその部屋には、大人たちが子供に隠している大事な秘密が隠されているように思えてきた。そんなら、と辰夫はどうしてもそれを暴いてやりたくなつた。

その夜はまた夜中じゅう、二階で爺ちゃんがごとごとやっていた。朝は起きてこなかった。辰夫が午後には下校するとバイクがなかった。辰夫は自分の部屋にカバンを投げ出すとすぐ二階へ上がってみた。退屈な授業中、ふと浮かんできた見当があった。爺ちゃんの部屋の天井に近く取り付けてある棚に何かを入れた大きめの茶封筒がいくつか並んでいる。背伸びして端から一つ一つ下ろして中身を調べていくと、たいていは領収書や何かの書類だったが、いくつ目かのいちばんよれよれになった袋の底に、あったあった、鍵があった、手垢で汚れた紐がついている大きめの鍵があった。やっばりな、と辰夫はちよつと嗤った。前にかんりの現金の入った封筒を、爺ちゃんはこっそり、脚立に上って一階の神棚に隠していた。背の低い爺ちゃんは大事なものを家の中の高い所に隠す癖がある。

恐る恐る、それを奥の部屋の引き戸の錠にさしこんで回した。カチツと音がした。ゆっくり戸を開けると中は暗かった。妙な臭いが鼻をついた。電気をつけた。絨毯を敷いた八畳ほどの部屋だが、ふしぎな部屋だ。まん中に台所のテーブルの倍も広いしっかりした木の台が据わっていて、その上には石臼、すり鉢、棒などのほか、見たこともない妙な形の道具が置かれている。学校の工作室みたいに木槌やペンチやガスバーナーなどの工具もある。階下に聞こえてくるもの音はこれらを使う音だったのだ。片側の壁には木棚がしつら

えてあつて、こちらは学校の理科室みたいに瓶や皿や鉢が並んでいる。いくつかの瓶には標本のようにイモリみたいな小動物や何かの草の根が入っている。下の方には木炭を入れた籠があつた。もう一方の壁にも棚があつて箱や紙の束が積んであり、箱の中を見てみるとなんなのか葉みたいな小さな紙包みがいっぱい入っていた。部屋の隅には台所のように流しがしつらえてあり、上の方に換気扇も付いている。もう一つの隅にはスチール製の物置きが置かれていたが、鍵が掛かつていた。作業の途中のようで、木の台の上のすり鉢には黒い粉と白い破片が混じっている。ここで爺ちゃんは何か薬のようなものを作っているらしいとようやく辰夫は感づいたが、それ以上はわからなかつた。しかし雨戸を閉め切つて一人でやっているその作業は、どうしても悪事のおいがした。辰夫は気分が悪くなり、また怖くなつた。急いで部屋を出た。引き戸に鍵をしてそれをもとの袋に戻した。

爺ちゃんはいぶ夜が更けてから帰つてきた。翌日の朝は顔を合せなかつた。その夕方、二人でテーブルに向かいあつて粗末な食事をしていた時、

「辰夫、おまえ、見たんか？」と爺ちゃんがぼつりと言つた。

辰夫は頭をはたかれたようにカツとした。

「二階のことや」爺ちゃんの声は低かつた。

「二階には上がるなどゆうであつたやろ？ 忘れたんか？」

辰夫は固まつた。抑えた低い声なのがこえて恐ろしかつた。よっぽど殴られる、殺されるかと思つた。いやそやけど、殴るんやつたらこつちも殴り返したるわ、と開き直つた。でも爺ちゃんは、

「そうかあ、見たんか」とだけ言つて、黙つた。

辰夫が固まつたままでいると、しばらくして爺ちゃんは大きなため息を一つつき、それからゆっくり話しはじめた。

「辰夫。オマエ、こんなこと考えたことあるか。人間は生きとる間にいろんな病気にかかる。それを治すのは薬と医術や。昔はな、大人だつたらだれもが多少は薬と医術のたしなみがあつて、ちよつとの病気やつたら、医者に行かんと仲間内で病気を治しあつたもんや。そやけど、今の時代はな、おかしなことに、薬と医術を医者独占してしもうとる。なんちゆうても金になるからな、儲けが莫大やからな。国家が元締めになつて法律で縛つてしもうとるんや。そやからふつうの人は、薬と医術から疎外されてしもうとるんや。本来は、薬と医術はみんなのもんやのにな。この世の中、おかしなことは山ほどあるけど、これはよっぽどおかしなこつちやで」

なにやら小難しいことを言いだした爺ちゃんは、わざとなのかそうでないのか、言い方が学校の校長先生みたいに威厳をよそおっている。言うことも態度も今まで見たことない爺ちゃんやと辰夫はわけがわからなかつた。そやけどそれが、いったいどんな話や？

「病氣にかかったら医者に診てもらうやろ。そやけど、医者の医術ゆうてもな、ほんまの

ところはしれたあるで。医者が治せん病気がいっぱいあるし、世の中には医者が知らん薬もいっぱいあるんや。そんな薬の中にはな、昔から伝えられてきたちようええ薬もある。

爺ちゃんが二階で作つるのはな、そんな薬の一つや。「黒焼き」ゆうて、昔からある、よう効く薬なんや。爺ちゃんはそれを自分で作って売って、今まで病氣の人をいっぱい助けてきたんやで。ほんまやで。そやけど国の許可がなかなかおりん薬やから、今のところは秘密にせないかんのや。そやから、ようゆうとくけど、おまえもぜったい黙つとれよ。爺ちゃんが「黒焼き」作つとることな、他言一切無用や。許可がとれるまではな。知られたらえらいことになる。わかつたな。……もうちよつとしたら、おまえにも作り方、教えたらうと思つたんや。中学出たらなあ」

爺ちゃんはそう言つて笑つた。爺ちゃんが笑うのも珍しければ、こんなふうに向かつて自分にたくさんしゃべつてくれるのもずいぶん久しぶりだと辰夫は思つた。

世の中がいつとき正月気分に分かれた後、三学期が始まり、しばらく経つた寒くて雪の舞つた日。

辰夫が夕方自転車を下校して自宅に近づくと、通りに出ている近所の人たちにじろじろ見られた。家の前にパトカーが一台止まり、庭に人相の悪いいかつい顔の三十代くらいの男が一人入りこんでいた。何が起つたのかわからなかった。爺ちゃんは留守のようだった。

男は辰夫を見るとせわしそうに近づいてきて、でも意外にやさしい調子で、

「辰夫君やな？ あのな、ちよつと前に、君のお爺ちゃんは警察が逮捕して連れていった。違法に薬を、いや薬みたいなもんを製造しとつたんでな。孫の君には直接伝えておこうと思つて待つとつた。両親はご不在なんやな？ お爺ちゃんは重い罪を犯したから、しばらくは戻つてこれんやろ。これから君も大変やろう。中学三年てか？ 身寄りはあるんか？ 警察でも相談に乗つたるから、ぜひ訪ねてきなさい。家の中はちよつと荒れとるが、捜査だつたんでな」と一気に告げた。

家の中に入るとどこもかしこもひっくり返されていた。二階の部屋は特にひどかった。土足で踏み入つた痕があった。奥の部屋は引き戸が開いていて、壁の棚にも扉の開いたスチールの物置にも道具類以外は何もなかった。

想像もしなかったことに、その夜から辰夫は突然一人になった。毎日一人で食べたり掃除洗濯したり買い出しに行つたりしなければならなかった。

もう学校に通える状況ではなくなった。初めの数日はマスコミが押しかけてきたり、電話をかけてきたりしてうるさかった。そのうちの二三人には応対したものの、不愉快になつて玄関に鍵をかけ、電話は放つておくことにした。けつこうな音量でテレビを流しておいた。地元のテレビ局は連日ニュースで爺ちゃんの事件をやつていた。見ながらふしぎに

辰夫は何も感じなかった。他人の身の上の出来事みたいな気がした。爺ちゃんは警察ですつと黙秘しているそうだ。爺ちゃんは深夜に各地の焼き場や墓地で人骨を集め、家に持ち帰って粉にして木炭の粉や薬草などと混ぜ、カプセルや袋に詰めて「黒焼き」として売っていたそうだ。集めた人骨がスチールの物置から大量に出てきた。爺ちゃんは前にも同じ罪で二度服役したことがあることも辰夫は今度初めて知った。

月が替わるとマスコミも押し寄せてこなくなった。事件以来、辰夫は学校をずっと休んだ。高校受験は放棄した。卒業式も休んだが、卒業証書は届けてもらえた。四月の終り頃になって、もと担任の先生が地元の土建会社の仕事を紹介してくれ、辰夫は勤めはじめたが一週間でいやになり、あとは家でぶらぶらしていた。爺ちゃんが辰夫名義でいくらかの預金をしてくれていたので、当座食べるのには困らない。数度しつこく児童相談所の所員が訪ねてきて支援の話をしていったが、辰夫は何も言わなかった。友だちは誰も訪ねてこなかった。

ぶらぶらしていると一日一日が早く過ぎた。無意味にいろいろな花が咲き、無意味に雨の季節になり、無意味にうだるような日々が続き、そして無意味に空気が冷えてきた。

辰夫は二カ月に一度くらい、初めは拘留所に、刑が決まってからは刑務所に、面会に行った。爺ちゃんはいつも元氣そうで、辰夫を見ると嬉しそうに笑った。裁判で懲役三年も判決を受けたのに、まるで反省しているようすはなかった。仕切り板をはきみながら、逮捕以来かえって自分によく話してくれるようになった爺ちゃん的笑顔が、どこか自分の顔に似ていると辰夫は思った。

爺ちゃんは辰夫の卒業を、「そうかあ、おまえももう一人前やな」と喜んでくれた。一人で毎日の生活はどうしているのか、とは訊かなかった。そして会うたびにこうくり返す。「前にもゆうたやろ。ワシの黒焼きは万能薬で、万病に効くええ薬や。これまでどれくらい病氣の人を救うてきたかわからん。ウソやない。よう効く薬やゆうて、固定客もあつちやこつちやに、今でも二十軒からしてあるんやで。皆、爺ちゃんの薬を待ってくれてはるんや。

あのな、あの黒焼きは爺ちゃんが初めて創ったのやないんや。爺ちゃんはな、ちようどお前くらいの年頃に、爺ちゃんの爺ちゃんから作り方、教わったんや。その爺ちゃんも、爺ちゃんから教わった、ゆうとったわ。そやから、あの黒焼きは家伝の秘薬なんや。わかるやろ？ そやから製法はぜったいに秘密や、誰にも教えられへん。皆あの手この手をつこうて爺ちゃんから聞き出したがるけどな、それだけは言えへん。ゆうたらワシの命がなくなるんや。爺ちゃんは爺ちゃんの爺ちゃんからはつきりそう言われたからな。ここでも、よつぽど吐け、吐けと責められたんやけどな、刑事にも、検事にも、呼ばれてきた大学の薬の先生にも、誰にも洩らさんかった。あいつらもよつぽど知りたいらしいで。それでたんまり儲けようと思とんのやな。ほんま、人の技術をただで盗もうとする悪い奴らやで。

爺ちゃんは絶対ゆうたらん。秘密の製法は全部この頭に入っとる。紙に残したら知られてしまうからな」と言つて爺ちゃんは軽く自分の頭を叩く。

「そやけどな、孫のオマエにはやがて教えたるつもりや。爺ちゃんがここ出たらな。ちよつと長いけど、待つとれや。その間にな、病氣や薬の勉強をちよつとしとけ。爺ちゃんの本棚の本があるから。人間ちゅうもんがいったいどういふもんなんか、人間の勉強もしとけ」

辰夫はこのごろよくがらんとした二階の奥の部屋に入つてみる。「黒焼き」やその材料はすべて持ち去られたが、木の台や道具類はそのまま残っている。それを眺めながら、「黒焼き」がそんなに長い間秘密に伝えられてきたちようええ薬なら、爺ちゃんの次は自分の番なのかな、と思いはじめている。

山に叫ぶ

近所の人たちとは犬を連れての散歩の時に言葉をかわすことが多い。退職して早朝の散歩が習慣化してからはなおさらだ。といつても、たいていはちよつと挨拶をかわすか短い会話をするくらいだ。相手が犬連れのこともあるし、そうでないこともある。

勤めている時も退職してからも、もう三十年近くも自宅周辺をそうして歩いてる間に、飼い犬たちはだいぶ移り変わった。思い出せば、鬼籍に入った子らが何匹となくいる。犬は長生きしても二十年未満で、もつと若くして死んでしまうものが多い。わが家の犬も、先代が十七歳で死に、今のタロももう十二歳の老犬だ。

犬の五、六分の一の速度だが、近所の人たちも移り変わった。長く住んでいる家では、子供が出て行き、連れ合いを失つて一人暮らしになった人たちも多い。どちらかが亡くなった家は、思い浮かべると、あの家もそうだ、この家もそうだと次々に数えられる。

去年の秋にも同じ並びの三軒先の家のお爺さんが八十歳くらいで亡くなった。元氣そうに見えていた人で、つい数年前まで、よく路地で縄跳びをしたりコンクリートの壁に野球のボールを投げたりしていたのだが、土木のアルバイトに出ている時のケガで身体を痛めてしまったらしい。それでもしばらくは、もうケガをする前の闊達さはなかったが、毎日努力して歩いていた。気のよい人で、そのころ路上で出会つたと、「タロくんは元氣やなあ。うらやましいわあ」とよく声をかけてもらった。だが動きも声もだんだん弱々しくなっていく感じだった。その後入院したといつか聞いたが、それから一年もしないうちに亡くな

った。家には持病で通院しているおばあさんが一人残された。

私の住む高台は山の南斜面で標高が二五〇メートルほどあつて、家を一步出れば至る所坂である。自宅を出て横手に歩いていくとかなり深い谷川に沿う道になって、その谷側にも比較的新しい家が数軒立っている。その端の家に白い小型の老犬がいる。地形に合わせたのか、独特なかたちの黄色い壁のその家は二世帯用に作られ、前に四五台も停まれるような駐車スペースがある。建てられたのは十五年ほど前だろうか、本村さんというその一家は街なかで八百屋を経営していると当時聞いた。そして五六年前から、私たちよりは数歳上らしいその家の老夫婦と散歩でよく行き合うようになった。ここ三年ほどは、両方が隠居暮らしふうにゆっくりしているので、そこはかとない立ち話もするようになった。

庭には車のほかにバイクも三台見えて、老夫婦それぞれが乗っている姿をよく見かけた。元気な方たちに見えた。出会うと二人とも愛想がよく、さすが長年の商売で鍛えられた態度だと思えた。息子さん夫婦が代を継いで、夫婦で仲よく悠々自適に暮らしているように見えた。ところが去年の秋ごろ、その奥さんの姿をしばらく見かけないと思っていたら、その近くに住む知人から、奥さんはバイクだけがををして入院しているという情報が入った。晩秋になって、朝のゴミ出しに夫婦で犬を連れて坂を下りてくるのに出会った。久しぶりに会う奥さんは、旦那さんの腕にすがってそろそろ歩き、以前よりはだいぶ弱っていた。こちらも二人だったが、いきなりケガのことを話題にするのはばかられ、軽い挨拶をするだけで行き過ぎた。その後も道を夫婦二人でゆっくり歩いている姿を二、三度は見かけた。会うと、天気のごあいから、散歩はいい、人間、健康が一番だ、というような話になった。

川沿いの道はその家から北の方へ数十メートルで尽き、山に入っている。そこからは土の道になり、五十メートルほど進むと谷川にかかる小橋を渡って森に入る。森の中をくねりながら二百メートルほどゆるやかに登ると、また別の広い高台で、住宅地が広がっている。その森の周辺でも近辺の人たちに行き合うことがある。毎朝ペットボトルに山の湧き水を汲んでくるおばさん、公園での太極拳の集まりから帰って来るもと小学校長の女先生、冬でもランニングの恰好で小走りするお爺さん。犬を連れて本村さんにもそのあたりでよく行き合う。

ところが、今年の松の内が明けた一月十日くらいのことだ。いつものように谷川にかかる橋のあたりで出会った本村さんが、話のごあいだと、「家内は、この四日に亡くなったんです」と洩らされた。私たちは驚いた。「長う入院してたんやけど、とうとういけんようになつてしもたんです。人間て、あっけないもんですわ」と本村さんは視線を落とした。大きな身体が少し震えたようだった。小犬を連れ、歯を食いしばるようにして歩いているのだとわかった。慰めようもないまま、私たちはありきたりの言葉を列ね、少し話して別れた。

本村さんにはその後も森のあたりで何度か出会った。ある時、やはり橋のあたりまでいっしょに歩いて二、三言葉をかわし、別れて私たち犬と森の中へ入ってくねった道をたどっている時、突然樹木の向こうから「あこく、あこく」という呼び声はつきり聞こえた。谷の奥の方に向かって叫んでいるようだった。もう一度「あこく、あこく」と聞こえ、山や谷が少し反響した。それだけで、後は静かになった。

「魂呼び」という古語がふと浮かんだ。その昔、死者の魂は山に宿るとされたらしい。ある歌人が死んだ妻を山に尋ねていく歌もなにかの歌集にある。古人も、山に入って大声で妻の名を呼ばわったのだろう。

フェリーの風景

毎週木曜は買い出しの日で、鏑木夫婦は自家用車を駆って海辺の大きな製鋼所に近いスーパーに行く。片道二十分余りかかるが、そのスーパーは大きくて廉価で、たとえば三斤のパン一本が一八四円で買える。しかもうまいパンだ。客層は平日の午前ということもあってだろう、夫婦と同じような年金生活者の老人が多いと見える。あまり豊かそうには見えない。夫婦はその店で一週間分として一万円分ほどの食料品を買う。往復の道は決まっていたいて十一時ごろには帰宅するのだが、今日は店を出て車のトランクに袋を納めた時、少し寄り道をして帰ろうと夫の嗣男が妻の倭子を誘った。倭子は「そうお。どうしようかな」とあまり気乗りしない顔だったが、嗣男は少し強く勧めた。

倭子は四年ほど前からパーキンソン病を患っていて、体力気力が衰え、疲れやすく、手足の振戦の症状もあるので遠出を好まない。以前も出不精のほうだったが、ますます出るのがおっくうになった。ただ、毎朝の一時間ほどの散歩は、病気の進行を遅らせるために欠かさない。嗣男はそれにも犬を連れて同行する。夫婦の家は六甲山の標高二五〇メートルの中腹にあるので、散歩の間によく港や海を眺める。国際港に出入りしている大きな船が自然に目についてきて、ネットや本で少しずつ調べていくと、船の種類や国内外の船会社のマークなどの知識がふえた。今では嗣男は大きな船ならたいいは腹のアルファベツトを読んだだけでは台湾の、香港の、日本の何々などと大手海運会社の名前を言うことができる。それらを散歩の途中に倭子に説明しているうちに、倭子もコンテナ船、自動車運搬船、バラ積み船、タンカー、フェリー、客船などは見分けるようになった。

中でもよく夫婦の目につくようになったのは、人工島に着く定時運航のカーフェリーで

ある。六甲アイランドという名の人工島の北側にはフェリーターミナルがあって、大分と結ぶさんふらわあと新門司と結ぶ阪九フェリーの着く岸壁が隣り合っている。月曜から金曜までは、夫婦が散歩に出る七時過ぎにはもう両方とも着岸し終わって仲よく並んでいる。どちらも白っぽい船体だが、さんふらわあは水平線を上る太陽をデザインした大きなマークが船腹によく目立つ。見がいがあるのは両船の運航時刻が少し遅い土曜と日曜の朝で、七時過ぎにさんふらわあが人工島の沖を航走し、カーブして港に入り、岸壁の前で一回転してから接岸する。そのころ阪九フェリーが人工島の沖に現れ、それも同じようなコースをたどってターミナルに近づき、バックしてさんふらわあの隣に接岸する。散歩の道からはそのすべてが見えるわけではないが、何度も眺めているうちにそうした船の動きがわかったのである。二つの船を、夫婦はサンちゃん、九ちゃんと呼ぶようになって、眺めておもしろがる。そんなふうにあだ名で、サンちゃんが停まっている、九ちゃんは今あそこというふうに言い合っていると、ペットのようにかわいく思えてきた。じっさい、山の中腹からかなりの距離を隔てて眺め下ろす分には、二隻とも風呂に浮かべたおもちゃの船ほどの小ささなのだ。じっさいはサンちゃんは一万一千余トン、九ちゃんは一万六千トンもある大型船なのだが、それにしても近くの港を出入りするコンテナ船や自動車運搬船の巨大さに比べればかわいいうである。

航走しているところ、ターミナルの付近で転回するところ、接岸しているところを港を舞台に毎朝演じられている無音劇のように眺めるにつけ、「いつかあのそばに行つて見てみよう」と嗣男は倭子に二、三度言った。今日買物をしている間にそのことを思い出して、三月の陽気もよいので、倭子を誘ったのである。

カーナビにフェリーターミナルをセットして、人工島への橋を渡り、十五分ほどでさんふらわあのフェリー乗り場に行き着いた。車から出てほんの三十メートルほど先に立ちほだかる壁のような船腹を認めたとたん、嗣男は思わず「おーっ！」と声を挙げた。高いのだ、大きいのだ。圧倒され、さすがが一万トン級だと感嘆した。とても「サンちゃん」とどと気やすく呼べるような代物ではない。倭子も「そうだね。すごいねえ」と同じ感想を洩らして、しばらく見上げていた。左右を見れば、タラップの施設も係船索も大がかりだ。赤いファンネル（煙突）も見上げながら船腹に沿って少し歩いた。船はだいぶ後の十九時出港で、今は休憩中のように人や車の出入りは見かけない。船首を確認したところで、右手を見ると四角い壁がまた高々と直立していた。それが隣の阪九フェリーの船尾なのだった。

人の姿のほとんどない待合所の中も巡ってみて、いったん外に出て今度は阪九フェリーのターミナルの方に回った。出入り口には時おり大型のトレーラーやトラックが出入りしている。その待合所ものぞいた後、やはり右舷を接岸している阪九フェリーの船体のそばまで行って眺め上げながら歩いた。さんふらわあよりもさらに高々と大きく、上階の客

室の外観はホテルのようだ。その下部の大きく構えた車輛甲板は数百台もの車を呑み込むのだ。こちらの岸壁でも人の姿はあまりなかったが、構内や道路を隔てた待機場にはトレーラーやトラックがもうかなりの数停まっている。

帰路の車の中で夫婦は、校外学習から帰る子供のように、間近に見た二隻の印象をあれこれと言いつつ合った。

その後ネットのページや二つの待合所でもらってきたパンフレットなどを見て、あらためてわかったこともあった。二つの神戸航路とも、同型の二隻ずつの船を運用して毎日の定時運航を実現していること、どの船も夜の間に瀬戸内海を航走し、十一時間ほどかかること、一隻のフェリーの寿命は四半世紀ほどであること、長距離カーフェリー業界も五十年ほど前に始まってから盛衰をくり返してきたこと、などである。

こうしてなんとなくフェリーに惹かれるのは、かつて自分たちもフェリーにはよく乗ったからだ、ということにも嗣男はあらためて気づいた。四国の徳島が故郷の嗣男は、まだ明石や鳴門に大橋が架かっていない時代、四国と関西を行き来するには定期航路の客船かフェリーに乗るしかなかった。結婚し、子供ができて四国の実家と車で往來したのもフェリーであった。正月の帰省には寒気の厳しい中、フェリーターミナルで三時間も乗船待ちしていたことがある。やはり混みあうお盆の時期には、甲板で新聞紙を引いて寝ころんだりもした。子供たちが小さなころはたまの乗船を喜んだ。フェリーで往來しているうちに、子供たちが育っていった。鏑木一家は二十数年前まで、そんなフェリーの時間を過ごしてきたのである。そして海峡に大橋がかかってからはまったく乗らなくなり、近くで見ることもなくなった。その後子供たちは成人して今や中年に近づき、夫婦は老いた。

翌朝鏑木夫婦はいつものコースを散歩したが、人工島のあたりは霧が濃くて二隻の姿は見分けられなかった。その次の日の土曜日、青みの増してくる海を航跡を引きながらカーブして港に入ってくるさんふらわあの雄姿を嗣男は目ざとく見つけた。二十分ほどして、阪九フェリーが後を追うように人工島の沖を島と平行にかなりの速度で澄まして滑ってくるのが見えた。どちらも山の中腹からではやはり掌の一部に乗るくらいの小ささだった。立ち止まって鉄柵をつかみながら眺めている倭子の手足が震えている。でも顔はやわらいで、「サンちゃんはまだもう着いてるね。九ちゃんはあれ？ もう他人とは思えないねえ」などと言うのだった。

芽吹きころに

イントロが流れ、夕方五時のニュースが始まった。別室のディレクターの指示を確認してから、感染除けのアクリル板の向こうでアナウンサーの五味と若い女子アナの加藤の二人が原稿に目を落としながらニュースを伝え始めた。リハール通りを進行していく。出番にはまだ少し間があるので、小此木憲夫も自分の原稿に目をやって最終確認するつもりになったが、今日はあまり気が乗らなかった。その短いコメントの原稿は報道局からの依頼を受けて一昨日自分で作成し、解説委員室や報道局の「検閲」を通ってきたものだが、自分では気に染まないところがあった。

原稿の内容は、今月になって国が本格的に始めた五歳から十一歳までの子供へのワクチン接種の進捗状況についてだった。新型コロナウイルスの世界的流行も三年目に入り、政府は国民への三回目のワクチン接種を急ぐとともに子供への摂取を準備、奨励しはじめた。そして全国の自治体で接種が始まった。マスコミも接種を勧奨する論調で随時それを報じているものの、しかし子供への接種ということでやはり全国の親たちが慎重になっているのだろう、出足は鈍かった。

小此木には七歳になる孫娘がいる。近所に暮らしているので、週に二、三度は家にやって来て遊んでいく。小此木も妻もこのうえなくかわいがっている。あの娘の小さな腕にもワクチン注射の針が突き刺さる場面を想像すると、心が騒ぐのだ。

小此木は孫娘の父親との昨夜の会話を思い出す。小此木の方から内科医である娘婿に電話をして、あらためて彼の見解を訊いてみたのだ。「お父さん、子供へのワクチン接種は絶対にダメですよ」と彼は断言した。彼はワクチン接種には強い疑問をもっている。昨春、接種が全国で本格的に始まった当時は、勤務先の病院の方針に従って彼自身も一回目を打ったのだが、その後まわりの副作用の状況を見聞したり自分で専門の論文を読んだりしているうちに、今度のワクチンは危険だと考えるようになった。そしてふだんは温厚な常識人である彼が、「あれはワクチンと言えるようなしろものではないですよ。治験の終わっていない試薬にすぎません。巨大資本や製薬会社もうけのために各国政府やマスコミを抱き込んで、副作用の害を隠蔽して接種キャンペーンをしているんですよ」とまで言うようになった。自分の妻には打たせず、義父母にもそう勧めてくる。「お父さん、ある日本のアンケート調査では医師や歯科医の九割が、自分の家族にはワクチンを打たせないという結果が出ています。医療人として今度のワクチンの危険性がよくわかっているからですよ。政府キャンペーンは国民の命と健康を守るとうそぶきながら、まったく国民を騙して愚弄しています。彼ら自身も打ってるかどうか、怪しいものですよ」。しかしそんな彼も、病院では不本意ながら求められればワクチンを打つ業務にも従わざるをえないでいる。

身近な医療人である彼とも議論しながら、小此木もこの二年間、今回のパンデミック騒

動について自ら調べ考えるように努めてきた。それは放送局の一解説委員として健康医療分野を担当している自身の仕事の一部でもあった。厚労省、政府、WHOなどの発表するデータや見解をカバーするのはもちろん、自ら専門家や医療機関にも取材して情報を集めた。世界のマスメディアのニュースや見解、ネット上に出ている研究者や医療関係者のさまざまな意見にも気を配った。世界的な科学誌に掲載されている関連論文にもいくつかはあたってみた。そしてわからなくなった。

世界や日本の主要な権力や権威は、PCR検査を勧めワクチン接種を主導し推進している。しかし今回声高に始められたPCR検査は有効性に疑いがあるという意見があり、新型の「遺伝子ワクチン」の安全性についても意見が対立している。推進側の厚労省が毎日発表する感染者数・重症者数・死者数の事実性や取り扱い方にも疑問がないわけではない。現実にワクチン接種後の死亡が多数出ているのに、ワクチンとの因果関係が不明だからという理由でいまだにワクチン死はゼロと公表されているのもずいぶんおかしい。

もともと理学部出身の小此木は、こうした事態には何よりも科学的な議論を優先すべきだと考え、ニュース解説の中でもそうした意見を述べてきた。政府もマスコミも科学的議論を軽視し、自らの利害を優先して、国民の恐怖心に訴えるプロパガンダを連日流し続けているのではないか、とまでは言えなかったが、それを示唆した。どうしても、十一年前の東北の原発大災害が思い起こされた。あの当時政府やマスコミは一貫して放射能の被害はさほど心配ないと広報して不安な国民をなだめにかかった。しかしその基礎に科学的考察が据えられていたかといえば、そうではない。今回は逆に恐怖心に訴えて国民をワクチン接種に駆り立てているが、科学的議論を軽視しているという点では二つの場合は共通していると思えた。そして今回は、始末の悪いことに政権を監視、批判すべき野党やリベラル系の多くの知識人たちまでが、六月の田んぼのカエルのようにワクチン接種推進の大合唱に加わってしまっている。

小此木は迷った。新型コロナウイルスの世界的蔓延自体は科学的真実なのだろう。しかしこれは毎年世界的に流行するインフルエンザ程度の、あるいはそれよりも軽い風邪の一種にすぎないという意見にも説得力を感じた。

一度解説委員室の定例の会議で、小此木はワクチン接種へのそうした懐疑の一端を口にしている意見を求めてみたことがある。しかし反応は冷淡なものだった。後で親しい一人に忠告された、「君、あんなことは不用意に口にしないほうがいい。陰謀論者と見られてしまうよ。上のほうや官邸に告げ口する奴がいるかもしれない。私の見るところでは、国民の九五パーセントが、積極的かどうかはともかく、政府の言うことに従っている。ワクチン接種率を見ればわかるだろう。九五パーセントには逆らわないことだよ」。

五味と加藤が交互にいくつかの主要なニュースを読み終わり、トピックスに移って、五味が現在五歳から十一歳までの子供へのワクチン接種率が対象者のわずか一パーセントし

か進んでいない、もっと進めるためにはどうしたらよいのか、と今日のテーマを提示した。それを加藤が受け、それではまず「街の声」をお聴きください、と言って、どこかで収録してきた三人ほどの声を流した。「街の声」といっても、もちろんいくつか拾った中から番組の趣旨に合うものだけを選別しているので、公平なものではない。年齢層や性別の異なる三つの声はどれも子供に接種をさせる、させる必要があるのではないかというものだった。「という声がありますが、小此木さん、どうですか？」と台本通りに五味が振ってきた。小此木は直接そのことにはふれず、たとえば、と言って、ワクチン接種先進国のイギリスでは大人のみならず子供たちへの接種率も高いことを挙げ、その国民全体へのワクチン接種が進んだイギリスで今まさにさまざまなコロナ対策の制限が撤廃され、社会経済活動がもとに戻ろうとしている、日本もやがてそのような状態に向かわないといけないでしょう、とこれも原稿通りにしゃべった。ただ、原稿にあった、「日本人ももっとワクチン接種の必要性を理解して、子供たちのワクチン接種ももっと推進して」という文言は省いてしまった。肝心の部分なのだが、数百万のリスナーに対して無責任なことは言えないという気がした。向かいで五味がちよつと首を傾げた。後で上から何か注意があるかと待っていたが、退勤の時刻が来ても、誰も何も言ってこなかった。

その夜小此木は寝苦しかった。進んでいないといっても、すでに何万人もの日本の小さな子供たちが接種を受けてしまったのだ、それはもう取り返しがつかないことかもしれない、これからもつと、どんどん増えていくのだ、自分も確実にそれに加担している一人だ、と思うといたたまれなかった。ワクチン反対派の立場に立つなら、この国では大人たちが寄ってたかってかわい子供を一人一人つかまえて幼い身体に毒を注入していることになる。子供はそのよしあしを自分で判断できない。ならば、もしその子供が死亡したり、副作用の症状に苦しんだり、後遺症が残ったりしたら、いったい誰が責任を取るのだ？ いつものことだが、原発大災害の時もそうだったが、この国の政治家も官僚もマスコミも専門家も、そして医師も一般の大人たちも、誰一人責任を取るつもりはないだろう。自分も含めて。

長い記者時代にも言いたいことを言っただけでつぶされ、言いたいことが言えなかったことも数知れずあったなと思ひ出された。若い時代には、「お高く留まっているが、局の解説委員なんて去勢されて権力に飼いなされた豚だよ」と仲間内で揶揄していたその解説委員の一人に自分はなってしまった、とも省みられた。せめて放送では、自分が正しいと信ずることを言うべきだろう。しかしあの動かぬ、どうしても跳ね返されてしまう分厚い鉛の壁……。虚空に赤や黄の巨大な渦が現れた。無数の人間がその渦にわらわらと巻き込まれていくようだった。血の色は足下にも渦巻いていた。ああ、自分は地獄に堕ちたのだと思っただけ。

日曜日、小此木夫婦は娘婿の運転で娘家族といっしょに箱根までドライブした。コロナ

禍で外出自粛のムードがずっと続いたので遠出は久しぶりだった。同じような家族が多いらしく、道路も観光地も混雑していた。まだどこでもマスクの人ばかりの異様さは相変わらずだったが、それでも小さな旅は心地よく、目にする自然には癒される思いがした。

レストランで、娘が、祐佳がこんなものを小学校からもらってきた、と小此木に見せた。自治体の子供へのワクチン接種を勧めるチラシだった。イラストも入って、「安全」、「大切な家族のために」、「重症化を防ぐ」などとウソっぽい字句が大文字で並んでいた。「祐佳に聞くと、校長先生も担任の先生も接種を勧めてるらしいのよ。お父さん、そんなの、おかしいでしょう？ ウチも怒ってるのよ」。小此木は「そうだな」とだけ答えた。

パーキングに車を置いて湖畔を皆で散歩した。陽気がもう春だった。行きかう人たちは子供連れも多く、男女の子供の笑顔やしなやかな動きが目についた。路傍の柳や紫陽花がやわらかに芽吹き、下草も青々と伸びていた。それらを眺めながら小此木は、草木の新芽は子供だ、と思った。この国の全部の学校や幼稚園や保育所に、人間の新芽がいっぱい育っているんだ、すこやかに育ってほしいと願った。今週もまたニュース番組で子供へのワクチン接種についてコメントする仕事が予定されている。たとえクビになってもかまわないから、今度こそは考えていることを言おう、節を曲げるのはよしたい、と思った。そのためにはどんな原稿を書いて「検閲」をすり抜けてやろうか。同僚や上司の苦い顔が浮かんだ。「おじいちゃん！」と笑顔の祐佳が寄ってきて手を取った。